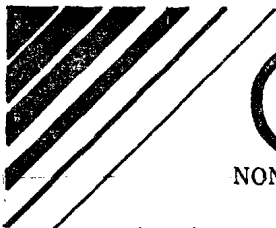


NON NOVEL



NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に「否定」を發し、人間の明日を支える新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説フィクションを通して、新しい価値を探っていきたい。小説の「おもしろさ」とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されてゆくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい「おもしろさ」発見の営みに全力を傾けます。ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—50

長編推理小説 むし ろうかく 蟲の楼閣

昭和51年9月30日 初版第1刷発行

著者 森 村 誠 一

発行者 黒 崎 勇

発行所 しやう 祥 でん 伝 しや 社

東京都千代田区神田神保町 3-6-5  
九段尚学ビル 〒101  
☎ 03 (265) 2081

発 売 小 学 館

印刷 堀内印刷 製本 ナショナル製本

編推理小説

村誠一  
の桜閣

祥伝社



# 目次

招かざる客 5

凶悪な消印 19

一流もどき会社 43

黒幕の意図 60

勘当された買収 73

好色の女狐 85

汚れた地下道 103

奪われた徒花 あだばな 113

失踪した符合 130

悪縁のたけくらべ 144

蒸発した地下道 163

管轄の盲点 170

死を結ぶ媒体 186

失われた英雄たち 204

殺意の順位 224

危険な祭り フェスティバル 243

羽化せざる殺意 うか 258

利得の元凶 271

翻訳された旧罪 278

怪女の賭 かけ 290

## 招かざる客

1

「暑いな」

地下室へ入ると、ムッと熱気が全身を押しつつんだ。ただでさえ多汗症の彼である。樽のような体軀に支えられた太い首と角張った精力的な顔がたちまち汗を吹き出す。

「二十八度の定温室です」

先に立って案内した白衣の男が、暑さが自分の責任であるかのように恐縮して言った。暑さだけではない。地下室には異様な臭気がこもっている。初めての者には吐気をもよおさせるような、一種の動物性の腐敗臭である。養蚕室の臭いに似ているところがあるが、もっと複雑な悪臭である。

「たまらない臭いだな」

男は、額の汗を拭きながら、眉をしかめた。「は、申しわけありません」

白衣の男が、また小腰をかがめた。地下室の中には数段の棚があり、そこに得体の知れないものを容れたガラスの容器が並んでいる。

白衣の男は、その容器の一つから数粒の豆のようなものを掌に乗せた。

「これが新しい人工豆かね」

多汗症の男が聞いた。

「さようでございます。百パーセントのアズキ粉末を篩って少量の水で丸薬状に練ったものをコロジオン膜で被覆し、容器の中で乾燥させたものです。豆の腹に穴が開いておりましょう。これは幼虫が食入し、アズキ粉末を栄養にして成長し、成虫となって出てきた跡でございます」

「本物のアズキとのちがいはどうなんだ」

「アズキそのものと比べて、成育期間、羽化率、羽化した成虫の形態、産卵数などほとんどちがいがございません」

「なるほど」

多汗症の男は満足そうにうなずいた。

「この人工豆は、すでに京大農学部いししいしゅうじょうの石井象二郎いしやうじろうという学者が発見したもので、新味のあるものではありませんが、これを『基材』といたしまして、成分を任意に抽出したり、加えたりして、新たな人工豆を開発できるようになりました。これは従来の天然の豆ではまったく考えられなかったことで、寄生虫の研究にとってじつに重要な意義があります」

「それで問題のインゲンのほうはどうなったのかね」

「多汗症」がうながした。

「目下、その成分の抽出と分析を進めているのですか……」

「アズキゾウムシの成育阻害物質は、まだわからんのか？」

「多汗症」はまた汗を拭いて眉をしかめた。暑さもひどいが、相手が短い様子である。

「インゲンの粉末をエーテルに浸漬しますと、脂肪の他にステロール、りん脂質などを含んだ粗脂肪が抽出されます。このエーテル抽出物はアズキゾウムシの成育に適しており、すると阻害物質は抽出残渣ざんざにあることになり、この残渣をクロホルム、アルコール、水で逐次抽出しました。その実験の結果、阻害物質はエー

テル、クロホルムに不溶、アルコールに一部可溶、水に可溶の物質で……」

「それで阻害物質はわかったのかね」

「多汗症」は上衣を脱いだ。シャツはすでに絞れるばかりに濡れている。

「サポニン、五炭糖ごたんじょうなどを抽出して検べたのですが、いまだ決定的な阻害物質を突きとめられません。しかし、阻害物質としてインゲン特有のものではなく、五炭糖の含有量あるいは蛋白たんぱくの相違によるものとも考えられますので、ただいまそちらに焦点を絞って研究を進めております」

「そうか、とにかくここを出よう。こう暑くてはかなわん」

「まだこの他にササゲ、エンドウ、ソラマメによる実験をごらんにいれたいのですが」

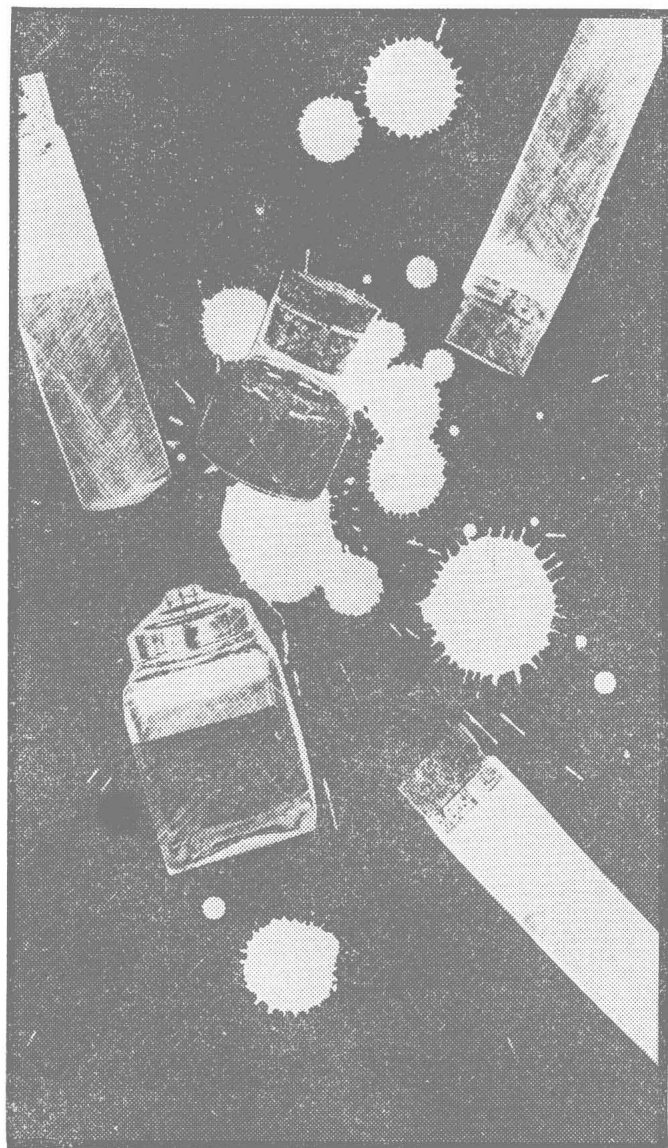
白衣は、べつの棚の方へ誘いたそうにした。

「もっと涼しい場所へ行って話を聞こう。こんな所になったら、体中の水分が蒸発してしまいうわい」

多汗症の男は、汗を拭き拭きすでに出口の方へ足を進めていた。

この昆虫研究室は、多汗症の男が経営する十数社の企





業集団の一環である農薬会社の静岡県御殿場研究所にある新施設である。多汗症の男は、ここに総工費一億ほどを注ぎ込んで、外部の影響を完全に遮断した地下昆虫研究室をつくった。そして高給をもって各大学研究室や国の農事試験場から優秀な技術者を引き抜いて、新農薬の開発研究に当たらせていたのである。

多汗症の男がその中でも、もっとも関心をもっているのが、アズキ、ササゲ、エンドウ、ダイズなどの害虫、アズキゾウムシの駆除剤であった。

アズキゾウムシの駆除剤はすでに何種類か生産されて市場に出ているが、いずれも満足すべきものではなかった。多汗症の男は、アズキゾウムシに対する決定的なクスリをつくりたかった。彼のアズキゾウムシに対する憎悪は異常なほどであった。なりふりかまわぬ集財家とか、金のおいにする所なら死体の懐にも鼻を突っ込む財界のハイエナなどと陰口をきかれていながらもかかわらず、アズキゾウムシとなると、採算を無視してのめりこむ。

その熱心さはこの御殿場の昆虫研究室を見てもわかる。アズキを食害する害虫は、アズキゾウムシだけでなく、マメアブラムシ、マメノメイガなどがある。さらに

アズキの病害としてモザイク病、褐斑病、葉枯れ病、絹病、白渋病などがある。アズキゾウムシの殺虫剤だけを単独に開発してもあまり意味はないし、アズキの生産がしだいに下降し、ある現在、企業的にもあまり妙味があるとはおもえない。それにもかかわらず、一億も設備投資をして、東京の本拠から週一回ほど様子を見にくる。

今日は、新しい人工豆ができたと聞いてきたのであるが、さすがの彼も定温室の暑さにはまいったらしい。上の涼しい部屋に場所を移して、技師から話を聞くことにした。

アズキゾウムシは鞘翅目マメゾウ科に属する。この科に属する昆虫は、豆の害虫が多い。成虫の体長は二、三ミリ、アズキ、ササゲの子実表面に産卵し、数日後孵化した幼虫は、子実中に入って食害する。成虫となって羽化すると、アズキの種皮に穴を開けて出てくる。

畑では実のさやに産卵し、幼虫は子実中に食入したまま収穫され、翌春成虫となって羽化脱出する。二十八度の定温で飼育すると、卵から孵化、前蛹、蛹を経て成虫になって寄り主の豆から出るまで約一ヵ月である。

日本では本州以南の各地に分布している。寄り主はア

ズキ、ササゲ、エンドウ、ダイズ、ソラマメなどであるが、アズキをもっとも好むようである。ところが不思議なことにアズキと同じ科のインゲンには寄生しない。産卵はしても、豆の中に食入した幼虫は一齡で死んでしまふ。

これはインゲンの中にアズキゾウムシの成育に必要な物質が欠けているか、あるいはその成育を阻害する物質が含まれていることを示唆するものである。そしてもし後者の場合が当てはまり、アズキゾウムシの阻害物質を発見抽出できれば、その決定的な阻止剤をつくれるという発想であった。

既存の殺虫剤はいずれも化学的な燻蒸剤で効果も強いが、他の虫や小動物までも殺し、複合汚染となつて人体にも悪影響をあたえる。

これがインゲン中から阻害物質を発見できれば、もともとインゲンは食物であり、インゲンを食べる虫もいるのだから、すべての生物に悪作用をあたえるような強い毒性はないはずと推測された。

こうしてインゲンの成分の分析と、人工豆の構成物質をさまざまに変えての虫の飼育実験が行なわれていた。

もちろん研究は、アズキゾウムシだけではないが、研

究所のもっとも大きなウエイトを占めていることは確かであった。当の研究に従事している人間を除いて、他の所員や社員は、社長の「道楽」と陰口をきいていたのである。

## 2

酒巻公市は妻の素子から交換学生の話聞いたとき、いやな予感がした。彼のその種の予感によく当たる。

パチンコの玉が、途中の当たり穴に入りそうに気をもたせながらも、結局、外れ穴に落ちてしまうように、こちらは自分の好かない方角だから進路を修正しようしようとしたにもかかわらず、もっとも悪い方角へ行ってしまう。

そんな経験がこれまでも何度かあった。それもたしかに偶然のめぐりあわせなのであるが、酒巻は今回ほど偶然という神のいたざらを実感したことはない。

「えっ、交換学生をえるのか!？」

夕食後、妻がなにげなく言いだしたことが彼に予感を走らせたのである。

「どうしたのよ、びっくりした顔をなさって。うちは受

入れ家庭として登録してあるんじゃないの」

妻は、酒巻の反応にかえって驚いたようであった。

「し、しかし、あんまり突然だったものだからね」

「交換行事は例年のことじゃないの」

「そうだったかなあ、よくおぼえていないけど」

「あなたがサボるからよ。あんまりサボると除名されちゃうわよ」

「それで今年はどこから来るんだい」

「アメリカよ、今回はカリフォルニアが神奈川、山梨の

受入れ担当になるそうよ」

「カリフォルニア！」

「カリフォルニアがどうしたの」

「それでカリフォルニアのどこからうちへ来るんだ？」

「そんなことわからないわよ、近いうちに交換委員会が

決めるでしょう。アメリカの学生を受け入れるとなると、

準備しなければならぬこともあるわ」

素子は浮き浮きとしていた。アメリカ人学生を受け入れるのが嬉しいのである。

所属のライオンズクラブからその運動の一つとして十

九歳から二十四歳の青少年を対象にして行なっている世

界青少年交換の受入れ家庭になってくれないかと頼まれ

て、気の進まない酒巻がためらっている間に、素子がさっさと引き受けてしまった。

外国人青少年を預るのはなにかと気をつかうし、責任が重いと彼が暗に反対すると、

「なに言ってるのよ、世話をするのは私よ。あなたが心配することなんかないわよ」

と登録をすませてしまった。われながら情けないが、妻が決めた以上、もはやどうにもならなかった。この家の「主権者」は彼ではなく、妻の素子なのである。多少

の不満を表情に表わすのが、せめてもの彼の抵抗であった。

それもあまり露骨に出してはならない。自分はいあまり乗気ではないのだが、おまえを愛しているから協力するのだという気配を相手に知らせる程度に留めなければならぬ。

ライオンズクラブなどに入らなければよかったと後悔しても遅い。それに妻の伯父の關係で入らざるを得なかったのである。

しかしカリフォルニアといっても、日本本土よりやや広く、神奈川県約百七十倍の広大な土地である。しかもそこから来る学生は十人である。

もしかすると、あの町からはまったく来ないかもしれない。交換学生はその地のライオンズクラブの交換委員会によって厳選される。ほとんどがライオンズの子弟であるが、外部から三割ほど募る。カリフォルニアのはずれの、地図にも乗っていないような町であるから、ライオンズクラブができていないかもしれない。外部募集もライオンズクラブのある町が対象になる。

あの町から学生が来る可能性はきわめて少ないと見てよいだろう。仮に、そのきわめてうすい可能性に当たって、あの町から学生が来たとしても、十人の中の一名である。その学生が自分の家に当たる確率は十分の一である。極小可能性の中のさらに十分の一の確率。

——大丈夫だ。心配することはない——

酒巻は自分に言いきかせた。来日交換学生の氏名と出身地が発表になった。その中に酒巻がもっとも恐れていたあの町の学生が入っていた。

——まだ十分の一の確率が残っている——

酒巻は外堀を埋めたてられて、最後の内堀に掘り当てていく気分であった。だが交換委員会が割り当ててきたのは、あの町の学生であった。交換委の割当てに異議を唱えるわけにはいかない。

学生を受入れ家庭の恣意に委ねると、それぞれのわがままが出て、收拾がつかなくなるので、すべて交換委員会の決定に従う規約になっている。

「あなた、きつと可愛らしげなお嬢さんよ、十九歳のカレッジ二年生ですって。あなたもむくつけき男よりも、可愛らしい女学生のほうがいいでしょう」

酒巻の内心も知らず、素子は天下太平にはしゃいでいた。

「女の子は責任が重い。男に替えられないのかい」

酒巻はさりげなく言った。

「無理しなくともいいのよ、本当は嬉しいんでしょ」

妻は、全然取りあおうとしない。

「本当に冗談でなく、女の子はもしもものことがあったら大変だ。替えられるものなら、男に替えてもらったほうがいい」

「今日のあなたはおかしいわよ。いったん交換委が決定した割当ては、よほどの事情がないかぎり替えられないのよ。それに男の子だって責任の重さは同じよ、むしろ男の子のほうが気をつかうわ」

素子は言い張った。彼女は夫が意見を異にしたとき（そんなことはめったになかったが）、夫を自分の優位の

下にねじ伏せてしまうことにサディスティックな喜びを感じているようであった。

「よほどの事情」はあるのだ。これ以上の事情はあるまい。しかしそれは口が裂けても言えない。それを言うときは、居心地のよい現在と、約束された将来を捨てるときである。

「きみがいいと言うならいいよ」

酒巻は、妥協するような口調で言った。

「あなただってその子が来れば歓迎するわよ」

「可愛らしげって、どうしてわかったんだい」

「十八、九歳の女の子って、みんな可愛いわよ、とくに

向こうの子は髪が金色で、目が青く澄んでいて」

「まだブロードとは決まっていけないだろう」

「プルネットだっていいわよ、私の英語の上手なところ

を見せてあげるわね」

「通訳はきみにまかせるよ」

「あなただってアメリカへ行ったことがあるんでしょ

う」

「ぼくは、ただ通過してきただけさ。英語なんてほとんど使わなかった」

「あなたもこの際、錆びついた英語をブラッシュアップ

しなさいよ、これから当分わが家は英語だけ話すことにしましうか」

「おいおい冗談じゃないよ。そんなことをされたら、家に帰れなくなる」

「大丈夫よ。でも学生が来たら、話さないわけにいかなくなるわよ」

「学生の名前はわかってるのかい」

「今日、あなたのお留守の間に連絡があったわ」

「なんと名前だ？」

「ジュディ・ギンズバーグよ」

「ギンズバーグ！」

酒巻の表情がこわばった。手にしたパイプが紫煙をく

ゆらしたまま床に落ちた。

「いったいどうなされたのよ」

酒巻のおもいがけない反応に、妻のほうがびっくりした。だが、彼の茫然自失はまだつづいている。

「あらあら大変、カーペットが焦げちゃうわ」

素子が、床に落ちたまま煙を上げているパイプの方に注意を取られたので、酒巻は異常な自失に気づかれないうちに自分を取り戻した。

「本当にどうなされたのよ」

妻がパイプを拾い上げ、カーペットに焼け焦げのないのを確かめた後で、酒巻の方を向いた。その間に彼は表情をつくっていた。

「いや、なんでもないよ」

「なんでもないって、あなた、パイプを床に落としたりして、変だよ、その学生知ってるの？」

「いや、ちょっと知っている人の名前に似ていたものだからね、しかしやっぱちがうよ」

「そうだったの、あんまりオーバーなのでびっくりするじゃないの」

妻は、深くも疑わず、追及を打ち切った。わがままな女であるが、恵まれた環境でなに一つ不自由なく育てられているので、あまり疑い深くないのが取得とリキエと言え、言える。

酒巻は、危ういところで妻から逃れた。だがやがてやってくる交換学生からはどう逃れようもないだろう。ジュディ・ギンズバーグ。もつとも恐れていた確率に当たったのだ。「ギンズバーグ」という名前は脳裡に刻みつけられている。あの女と同性者が、しかも同じ町からやって来るとは！ これはやはり因果というものであろうか。

日本滞在中の学生の保護者は自分である。ライオンズクラブ主催の数々のパーティや催しもよ事にも同行しなければならぬ、家においては、寄留者として生活の諸事万端の面倒を見なければならぬ。

家に入り込まれて、生活の細部まで見られてしまうのだ。ふとしたはずみに、あのことを嗅ぎつけられてしまうかもしれない。

しかし、と酒巻はおもいなおした。——ギンズバーグという名前ファミリーネームが同一であっても、必ずしもあの女と関わりがあるとはかぎらない。小さな田舎町では姓の同じ住人は多い。遠い先祖においては血のつながりがあったかもしれないが、いまでも親戚付き合いをしているとはかぎらない。

また、あのことはだれも知らない。自分の胸の中に深く畳み込まれている。証拠はなににも残していないはずだ。

時間も距離も遠く離れたアメリカの田舎町の出来事と自分を結びつけるものはなにもないはずだ。よしんば、ジュディ・ギンズバーグがああギンズバーグのゆかりの者であったとしても、自分とあの出来事を結びつけられないだろう。——

(そうだ、証拠はなにもない。おれは物事を悪いほうにばかり考えたがっている。平然としていけばよい。平然としてジュディ・ギンズバーグを迎えるのだ)

酒巻は、自分を無理に説き伏せた。

ジュディ・ギンズバーグが来日したのは、七月十五日であった。DC—8を一機チャーターして、一行約二百名は、全国のライオンズクラブの受入れ家庭に預けられて、三、四週間の「日本の夏休み」を過ごす。

羽田に着いた一行は、ターミナルビルの記者会見室でライオンズクラブの歓迎の辞を受けた後、それぞれ受入れホームのペアレント(保護者)に付き添われて、全国へ散っていった。

ジュディ・ギンズバーグは、素子が予想したとおり、金髪に碧い瞳をもつ美しい娘だった。聡明そうなひいでた額ざわから長く伸びた金髪は、肩の上までしなやかに波打っている。目が大きくはっきりした意志をしめしている。唇も頬も豊かであった。体形は細いが、着やせするたちかもしれない。背は日本女性の標準程度である。

素子がわりあい流暢な英語でジュディと話している。

時折、酒巻の方へ得意げな視線を投げた。それは自分の

英語と、ジュディが予想したとおりの、いや以上の娘だったことを誇っているのである。

ジュディは酒巻の方にも愛嬌のいい笑顔を向けて、「お世話になります」というような意味のことを言った。その素直な、ペアレントを信頼しきった笑顔を振り向けられたとき酒巻の胸底にくすぶっていた不安は、いっくらか鎮められたのである。

### 3

ジュディは速やかに酒巻家の中に溶け込んできた。アメリカから来たという、東京化と、田舎の泥くささが未消化に入りまじっているこのあたりでは、世界最高の物質文明を達成した先進国から来たように錯覚しがちであるが、物質文明の平均点においては、いまや日本のほうがはるかに高い。アメリカはコントララストの国であり、上限においては、日本とはスケールがちがうが、平均的消費生活では日本のほうが贅沢である。

なにかにつけて大ざっぱで、埃っぽくて平板な西部の田舎町から来たこのアメリカ娘は、日本の毎日お祭りのような活気と、賑わいに素直な驚きを表わした。とりわ



けどんな小さな田舎町でも駅前の人がたくさん歩いていて、小売店が軒を連ねているのには、びっくりしたらしい。

「アメリカの町は、たいてい信号が三つか四つで通りすぎてしまうわ。目抜き通りには、スーパーとガソリンスタンドとドライブインとモーターと銀行があつて、どこでも同じ風景よ。ジュークボックスの音楽と、うすいコーヒーとハンバーガーと砂埃と通りすぎる車だけ。退屈で退屈で気が狂いそうなのがあるわ。私は喫つたことはないけど、その退屈から逃れるために、アメリカではおとなでもマリファナや大麻を喫うのよ。それに比べたら日本はすばらしいわ。どこへ行つても、東京と同じ活気がある。ただ活気があるだけでなくて、人間の生活が感じられるのよ。砂漠と岩山だけの西部なんか、人間の住む所じゃない。日本でこんなすばらしい所だとはおもわなかつたわ」

ジュディは手放して礼賛した。それはまんざらお世辞でもないらしい。彼女は日本が気に入つたのだ。

十数年前のアメリカを知る酒巻には、ジュディの素朴な驚きがよくわかつた。実際毎日居眠りしているような西部の田舎町からいきなり、人口密度十四倍の日本の喧

噪の中へ放り込まれたら免疫のない若者は、その強烈な刺激にびっくりしてしまうだろう。

いまの日本は、まさに若者向きの刺激に満ちている。アメリカならばニューヨークへでも行かなければ容易に得られない刺激が、都会と田舎の区別が曖昧になりつつある日本では、どこにいても手軽に得られる。しかも平均価の刺激としてである。

それがアメリカの場合は、平均価の刺激すら容易に得られないから、極端へ走りがちとなる。

ジュディは、電車に乗つては、いちいち自分の行先をていねいに放送で教えてくれるのに感心し、喫茶店やパチンコ店にもあるオートドアに嘆声を発し、どここの家庭にもある強中弱に明かるさが切り換えられる電気スタンドに感嘆した。

「アメリカの列車や電車には車内放送の装置なんかないわ。だいいち駅が日本のようにそれぞれ町や村にないのよ。大きな都市でも市民が駅の場所を知らないくらいだわ。日本つて凄くお金持ちなのね、オートドアなんて、ニューヨークやサンフランシスコへ行つたつて、めつたにないわよ、もっとも私はニューヨークへは行つたことないけど、きつとないわよ。スタンドなんて、点くか、